

都会の夜の屋上で～年上お姉さんとの初体験～②

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「智史、すごい！ 本当にすごい！ 成績が伸び始めたの。しかも、大幅に！」

彼女の勉強を見始めて、三ヶ月が経っていた。

本来なら、ここからやっと“伸びる土台”が整う時期だ。それなのに——彼女の努力のせいか、もう結果が出始めていた。

「英語なんて偏差値五十だよ！ ねえ、聞いてよ、五十だよ！」

彼女は弾む声で続ける。

……そうだろう。

彼女は難関大レベルまで単語を全部覚えていた。文法の基礎が繋がった瞬間、一気に理解が開いたのだ。

「よかったね。俺も鼻高々だ」

胸の奥の強張りがふっと解ける。

彼女のディスレクシアに対するアプローチは、やっぱり間違っていなかった。

俺は、毎日使っているちゃぶ台の隣に座った。

彼女も同じように腰を下ろす——けれど、今日は距離が近い。

「智史のおかげだよ」

「そんなことはない、君の——」

前のキスとは、まるで違う。

触れるだけのものじゃない。

熱のこもった、逃げ場のない近さ。

次の瞬間、彼女の舌が柔らかく触れ——入り込んできた。

「……っ」

思わず息が止まる。

一度だけ唇を離した彼女が、囁くように言った。

「リラックスして」

涼やかな声だった。

それから、また唇が重なる。

今度は深く。

彼女の舌が俺の口の中を探り、絡め、味わうようにゆっくりと動く。

俺は——完全に受け身だった。

彼女の呼吸も、体温も、舌の動きも。

全てが俺を溶かすようで、力が抜けていく。

唾液が混じり合い、温度がひとつに重なる。

頭がぼんやりして、何も考えられなくなった。

いつもより、ずっと長いキスだった。

たまにキスをすることはあった。もちろん、彼女からだ。
それは触れるだけの、刹那のキスで——
彼女の存在の“余韻”だけを残していくような、軽いものだった。
でも、今日は違った。
彼女が俺を求めるみたいに、
むさぼるように深く、乱暴と言えるほど強く——
息を奪われるようなキスだった。
どれくらい続いたんだろう。
数十秒……いや、もっとかもしれない。
彼女が俺の世界を、唇だけで満たしていくような感覚だった。
「どう……だった？」
「えっ、いや……」
言葉がうまく出てこない。
胸が熱くて、息が震えていた。
大人のキスって、こんなに心地いいものなんだ……。
そんな幼い感想しか浮かばない自分に、頭が追いつかない。
すると彼女は、柔らかい声で続けた。
「もう一回しよ。——今度は、智史も舌を動かして？」
そう言って、そっと腕を回してくる。
包み込むように、身を寄せて。
彼女の体温がすぐそこにあって、逃げ場なんてどこにもなかった。
俺も見よう見まねで、彼女の背にそっと腕を回す。
触れていいのか迷うくせに、離れたくもない。
そんなざこちなさを誤魔化すように、舌を彼女に預けた。
彼女のキスは、ただ絡めるだけじゃなかった。
ゆっくりと角度を変え、触れ方を変え、息の吸い方まで誘導してくる。
歯の縁をかすめ、唇の端を甘くなぞり——
俺の知らない世界を、口づけだけで見せてくる。呼吸がどんどん荒くなり、頭の芯が熱くなる。
数分ほど続いたあと、ようやく唇が離れた。
「——どう？ 私のキスのテクニックは？」
「えっ……あっ……うん……その……」
まともに答えられない。
胸の奥がまだずっと痺れたままだ。
彼女はそんな俺を見て、いたずらっぽく笑う。
「そっか。……ちょっと刺激が強すぎた？」
そう囁きながら、そっと俺の太ももに手を置いた。
からかうように、でも優しくて——逃げられない距離で。
鼓動が一気に跳ね上がる。
「もう……こんなに反応してる。智史って、本当に可愛いね」

彼女はくすっと笑い、からかうように俺を見上げてくる。

胸の奥がきゅっと締まった。

そのまま抱き合っていた腕を、彼女はすっとほどいた。

「——今日のご褒美はここまでね。ほら、勉強するんでしょう？　ちゃんとやろ？」

「う、うん……」

正直、心はまったく切り替えられていなかった。

目の前で息を乱す彼女を見るたび、さっきまで抱きしめていた腕に、別の衝動が走る。

押し倒したい——そんな生々しい欲望が、喉元までこみ上げてきた。

だが。

脳裏に、あの屋上の夜が——彼女が手すりの外側に立っていた姿が——鮮明によみがえる。

あの絶望の顔。

かすれた声。

今も胸の奥に棘のように残っている、あの冷たい風。

その記憶が、俺の体に向けられたブレーキだった。

……違う。

俺が助けたいのは、彼女の心と未来だ。

ここで流されるのは、違う。

「じゃ、今日はパラグラフの読み取り方を教えるね」

俺は気持ちを切り替えて、彼女に勉強を教え始めた。

頭の中にまださっきのキスの熱が残っていても、手だけは冷静にノートを書き、説明を続けた。

——そしてその夜。

ひとり机に向かい、パソコンを開いた瞬間、胸の奥で抑えていた何かが噴き出した。

画面に映る映像よりも、彼女の唇の柔らかさ、舌の動き、息の混じる甘い気配——

そっちのほうに鮮明すぎて、まったく比較にならない。

思い出すたび、体の奥がじんと熱くなる。

気がつけば、何度もその記憶に引き戻されていた。

……自分でも驚くほど、一気に解放された。

こんなにも強烈な“余韻”を残すキスがあるなんて、知らなかった。

翌日。

昨日教えたパラグラフの読み取りは、正直難しい。

それでも彼女は諦めず、必死にノートを広げていた。

「できた！　こういうことだよ、智史！」

赤ペンで印のついた箇所を見せてくる。

俺はそのページを確認しながら、思わず息を呑んだ。

——ちゃんと、理解できている。

あの夜の記憶が胸の奥に残り続けていても、

彼女は確かに前へ進んでいた。

「うん、大丈夫。合ってるよ」